

Life・Culture & Welfare 地域から発信 福祉を文化へ

焼津福祉文化共創研究会通信 第69号

●4月定例研究会「ご近所福祉」検証

地域実践活動者を迎えて、身近な地域課題を大いに語り合う

7年目の活動に入り、4月26日開催した「4月定例会」は、焼津市内で小地域活動に取り組みられている実践者を迎えて、尊い「地域活動への参加のきっかけと活動の現状」を学ぶことが出来た。実践事例の概要は次の通り。

定年退職後、地域への関わり・地域参加の糸口として、市社協主催の「居場所関連講座」に参加した。講座修了後、学びを実践に活かそうと、受講者の5名程の皆さんと共に、町内会役員との協議により、公会堂の使用が認められて「居場所」を立ち上げ、月1回平日午前に関所し4年程が経過した。この公会堂では、開催曜日を変えて、ほかのグループが「居場所」を開所している。登録制をしないで、毎回15名程の高齢者の方々が参加し、和やかなひと時を過ごしている。運営費は、参加費200円と町内会及び市社協助成金をもとに、毎回「行事用保険」に加入、全体の運営に活用している。毎月の運営プログラムは、地域の資源を活用しながらも、集団的支援から個別支援等工夫をしながら取り組んでいる。男性の参加呼びかけ等の課題がある。広く、市内の各種講座等に積極的に参加されて、情報交換の機会をもつ努力をされている。

○尊い実践活動事例の学びから、浮き彫りになった要点は、

1. 地域活動への4つのアクセス

A 条件が整った・生活に一区切り出来た

定年退職・子供の成長とともに、地域を知るために

B 講座や学習会、研修会の延線上で、いかに、地域課題を把握し、学びを実践活動に活かすことが出来るか

C 身近な地域環境で、高齢者や障害者問題でご苦労されている方々に共感して協力する

D 今でなければ、チャンスがない まずは実践すること

2. 改めて、今、なぜ“居場所”かを考える

昭和50年代当初は、高齢化社会(高齢化率7% 昭和33年時代)から、高齢社会(高齢化率14% 平成7年時代)を迎えるに当たり、高齢者問題を取り上げ、その中で、「居場所」が開設されている。

2000年に介護保険制度が導入されたが、制度改正で、地域移行になる中で改めて「居場所」が浮上している。超高齢社会(高齢化率21% 平成22年時代)になり、ますます、地域社会全体で支え合う仕組みの課題がある。世代や領域を超えて「みんなの居場所」の時代を迎えている

3. 地域活動の3要素

(1)「もの」・・・地域資源の開拓・活動拠点 →「公会堂の活用」

(2)「人」・・・地域資源の開拓・担い手(支援者) →「地域住民」

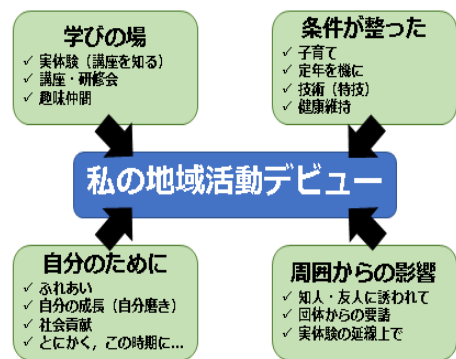
(3)「かね」・・・活動費 →「市からの助成金」(申請に基づき)「町内からの助成金」「参加費」

4. 地域性の把握 →「小地域における活動のあり方」「コミュニティ活動における福祉活動の位置づけ」

5. 活動・運営の工夫 → 当事者(参加者)主体の運営ができるか、また、対等な関係を維持できるか
さまざまな援助技術 →「集団援助」から「グループ援助」そして「個別援助」への発展

6. 協働による地域活動 → 地縁組織：コミュニティ組織(リーダー)の認識の有無
志縁組織：管内の関係団体等の認識の有無

▶ 私の地域デビューのきっかけ



(地区民生委員児童委員協議会、さわやかクラブ、子ども会、趣味同好会等)

- 7. 地域住民の意識改革 → 「与える福祉からつくる福祉」「住民主体・住民参加」
- 8. 身近な地域の情報収集方法の工夫

●いろいろな居場所開設事例 「いかずい北川原」(居場所)開設の経過と現状を語る

ゲストによる尊い活動事例(居場所立ち上げと現状)に関連して、本会定例研究会会場である「北川原公会堂」では、これまで6年間「いかずい北川原」名称で「居場所」を開所した経緯を紹介した。

- ◆平成26年度から3年間にわたり、これからの公会堂の有効活用を議論をした。区画整理により、借地に旧公会堂を立てていたが、解体後、公会堂の必要性を議論し、町内会の土地を保有し新たに新設した。公会堂を縛りのある管理的使用規程から、自由に使用できる開放型規程改正し有効活用の一環として「みんなの居場所—いかずい北川原」開設を町内会事業(町内会内の「公会堂運営委員会」に置いて、毎月状況報告協議)として位置づけた。毎週金曜日9時から15時まで、来てよし帰ってよしの自由に立ち寄れる場所として、町内外の誰もが利用できる運営に努めた。

<p>キャッチコピー</p> <p>“地域ぐるみの居場所”をめざす!</p>	
<p>活動紹介</p> 	<p>平成29年5月に「いかずい北川原」は開所しました。名称は「いきましよう、400年の歴史あるこの地域へ」の思いを込めて、港第14自治会、第12町内会の総会で決まり、北川原公会堂運営委員会(月1回開催)のもとに運営しています。</p> <p>“集める居場所”から“集まる居場所”に努め、多くの人を集めるのではなく、少人数でも運営できる環境づくりに心がけています。</p> <p>おしゃべりが基本ですが、お互いに話題を持ち寄り「楽しい居場所」になるよう心がけています。3年目の今年、テーマ型プログラム(第1週脳トレ、第2週創作、第3週介護相談)を設けて自由に参加できる環境づくりを試みました。</p>
<p>メッセージ</p> <p>北川原地区は、長年にわたり、会員相互の連携と協働による支え合いにより、過ごしやすい地域環境が維持されています。</p> <p>一般社会で言われている「高齢者支援」中心の「居場所」ではない、「地域ぐるみの居場所」としての機能を持ち、「自然発生的」「新規単独型の居場所」「共助型」として、開所3年目を迎え引き続き、広く会員相互に共有し、世代を超えて、いつでも、だれでも気兼ねなく「立ち寄る居場所」を目的としています。 ※他の町内会の方々も自由に立ち寄れます。 【世話人代表 平田厚】</p>	<p>ここに注目!!</p> <p>地域のご近所づきあいから発生した年齢に関係なく誰もが集まれる「自然開放型居場所」です。居場所と町内会のお知らせや行事を掲載した「いかずい北川原通信」を毎月発行し、2019年2月にて第64号まで発行しています。</p> 
<p>やいちゃんのワンポイント</p> 	<p>居場所のいろいろなお話をお聞きして、地域のことを大変熱心にお考えになっており、将来を見据えて活動なさっていることが伝わってきました。居場所「いかずい北川原」は、高齢者はもちろん親子でも子供たちだけでも気軽に立ち寄れる居場所です。利用者と運営側との垣根がなく、同じ目線で運営されている理想的な「寄り合い処」の一つです。この3年間で趣味同好会も誕生しています。</p>

- ◆公会堂の有効活用の兆しが見えてきたとして町内会事業6年間の実践の位置づけを解いた。これまでの取り組みからの考察として、当地区は、これまで、農業中心の集落であり、住民同士の強いつながりがあった。その後、長年の区画整理事業により、60世帯が180世帯ほどになり、若い世代家族の居住者が多くなり(高齢率20%以下)、新たな地域課題が浮上しているコミュニティ運営に、「福祉事業」をいかに位置づけていくか、町内会に「集まる場所」がある認識を、広く会員に啓発し、今後さらに、地域交流できる場所としていく取り組みが期待される。



*町内会福祉事業「いかずい北川原居場所」開設式に、多くの方々に参加した

●ここまでの活動から“集まる居場所”と“集める居場所”を検証する

楽しいを創る私の地域は、「集めるから集まる地域」を心掛けることを確認した。

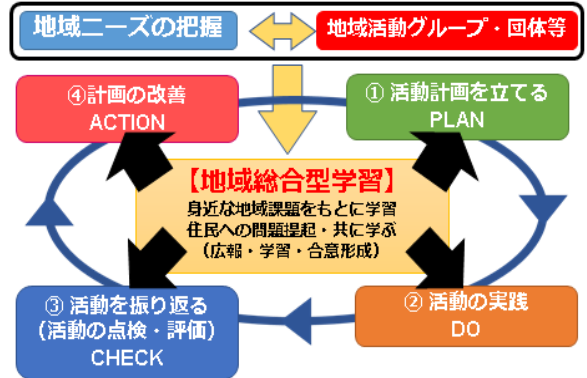
キーワード	心境	場所	自発性	主役	人数	ルール	組織関係	相性	開催
集める地域	建前	公的	誘われ従う	関係者ボランティア	大勢	あり	あり	無視	月1回程度
集まる地域	本音	私的	自発的積極的	本人 仲間	4~5名程度	なし自発的	なし 対等	大切	ほぼ毎日

本会では、さまざまな分野で活動する人たちや福祉職に従事する人たちが、専門分野と世代を超えて交流を図ることや、会員だけが求心的・閉鎖的に集うのではなく、広く市民に開かれた活動をめざしている。

また、既存のコミュニティ・福祉組織の活動から取り残された問題や新しく発生してきた問題を大切にし、つねに市民生活に密着した活動をめざすなどを掲げている。

今年度は、特に、着眼項目として「地域実践活動事例」をもとに、“ご近所福祉”を検証し、これまでの6年間の「ご近所福祉の地域課題」をさらに整理し、これからの地域づくりについて議論を深めるためにも、こうした貴重な実践事例を基に学び合っていきたい。

> 地域活動の基本



●懐かしい学び合いの一コマ“地域ささえあい講座”

平成28年度「港地域ささえあい講座」を開講。プログラムの一つ「ワークショップ：支え合いゲーム」では、参加者それぞれが「困りごとカード」3枚づつを持ち、お互いに、支え、支えられる関係が成立すれば握手。世代を超えた学びの場では、「スマホの操作教えてほしい」「じゃあ、お任せください」で一斉落着。助け上手と助けられ上手が見事に演出できた。こんな地域であれば、いつでも、何でも言い合える。◇今年度の月例研究会は、「私の困りごとを、ご近所の支え合いで、どのように解決できるか、アイデアを出し合います。ぜひご参加を。



■ 公益財団法人さわやか福祉財団助成事業「地域共生社会をめざす仕組み検証事業」 「ホッとする、安心した地域づくり その意識と実態調査報告書」より

4月定例研究会の実践事例に関連して、本会が、港地域づくり推進会(港第14・23自治会)管内の高齢者(315名回答)を対象に、2022年度(令和4年度)に実施した調査から「居場所」「住み慣れた地域で困った時必要なこと」「地域に必要なこと」の回答を紹介する。

□居場所に運営について

- ①いつでも自由に入出りできる環境を望む62%
- ②利用者同士で仲間づくりが出来る環境17%
- ③自治会・町内会等が主体となって運営する環境10%
- ④ボランティアによる計画的な運営7%
- ⑤利用者同士が主体となって運営する環境7%
- ⑥福祉施設が地域貢献として1%

□住み慣れた地域で困った時必要なこと

- ①見守り・声掛け(安否確認)30%
- ②災害時の手助け13%
- ③移動支援10%
- ④同行支援(買い物・通院)9%
- ⑤話し相手7%
- ⑥掃除(草取り)6%
- ⑦ゴミ出し等簡単な介助・介護5%
- ⑧定期的なふれあいサロン(居場所)・配食4%
- ⑨調理・簡単な修理2%
- ⑩墓の掃除・洗濯・趣味の援助1%

□地域に必要なこと

- ①ご近所の支え合い29%
- ②身近な人の見守りと助言体制18%
- ③コミュニティ組織体制の確立13%
- ④身近なところで「居場所」の開設9%
- ⑤相談体制や情報提供の充実8%
- ⑥地縁組織[自治会・町内会]等の積極的な歩み寄り7%
- ⑦市行政の地域への積極的な歩み寄り6%
- ⑧福祉人材の養成・福祉団体等の地域への積極的な歩み寄り 各3%
- ⑨企業・学校・地域社会における(福祉教育)の推進・NPO法人等志縁団体の困りごとの支援体制 各2%





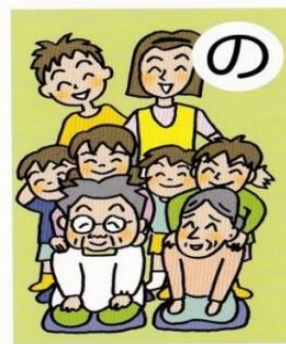
シリーズ⑬ 若者発 ご近所福祉かるたで学ぶ

このコーナーでは、平成27年度・令和3年度・令和6年度に、協働団体：静岡福祉文化を考える会が、赤い羽根共同募金地域福祉広域助成事業により、世代を超えて身近な地域社会を学ぶ、地域福祉教育教材として作成した「若者発 ご近所福祉かるた」(本会活動参画)を本誌第57号から「シリーズ」で紹介。今回は「ね」「の」「絵札」は、漫画家 法月理栄様が作画。

*かるた等の問い合わせは、054-624-1924 平田まで



助け合い・思いやりの輪は、私たちの地域の隅々まで広げなければなりません。世代や領域を超えて、みんなで実践して、「地域の福祉力」を高めていきましょう。



住み慣れた地域で、思いやりやお互い様の気持ちを広げたいものです。みんなで「地域ぐるみの福祉教育」を心掛けていきましょう。



*桜が散り、庭先にリンゴの花が開花！

*あちらこちらで「ふじの花」が見頃

*昨年より、一週間遅れでクンスランが咲き始めた

焼津福祉文化共創研究会事務局日誌拝見(4/16~5/25)

- 4/26 4月(第73回)定例研究会開催
- 4/30 4月(第73回)定例研究会議事録作成(ブログアップ依頼)
「焼津福祉文化共創研究会通信第69号」作成作業
- 5/01 「焼津福祉文化共創研究会通信第69号」配布・メール送信作業
- 5/17 5月(第74回)定例研究会開催
- 5/24 焼津市V連絡協議会研修会参加(浜岡原子力発電所見学)

「協働団体：静岡福祉文化を考える会」第1回公開型研修会開催(静岡市清水区寄ってっ亭)



本会は、平成28年度から3年間、中学校区を中心に、地域の課題を学び合おうと、住民主体に「地域ささえあい講座」を開講し、延べ614名の地域住民が参加した。この学び合いの成果をもとに、継続的な話し合いの場をつくろうと、令和元年度に結成し7年目の活動に入った。身近な地域のことを一緒に語りませんか。

本会(「焼津福祉文化共創研究会」)への問い合わせは下記をお願いします。

〒425-0041 焼津市石津3丁目10-8 焼津福祉文化共創研究会 平田 厚
Tel&fax054-624-1924 090-4861-4547
E-MAIL: monogusa-tomy@theia.ocn.ne.jp



焼津福祉文化共創研究会QRコード



協働団体：静岡福祉文化を考える会QRコード